2023年 2月 13日

森と海の自然科

峠巡り②高安山と十三峠のご案内

担当；Ｃグループ　藤井・東川（案内文）

近鉄西信貴ケーブル高安山駅から信貴生駒スカイライン沿いに歩き十三峠を目指します。途中天気が良ければビューポイントで素晴らしい景色が見られると思います。十三峠の地蔵尊、十三塚を見学し、十三峠の広場で昼食とします。その後十三峠越えの道を下り水呑地蔵尊、玉祖神社、愛宕塚古墳、心合寺山古墳等を見学して近鉄服部川駅へと歩きます。

日時　2023年 3月 2日（木）

集合　10時40分　近鉄西信貴ケーブル高安山上駅改札口前

近鉄信貴山口駅発10:25西信貴ケーブルに遅れないように乗ってください。高安山駅着10:32です

持ち物　飲み物、弁当、雨具、双眼鏡、敷物、懐中電灯（愛宕塚古墳内部点灯）

ストック等各自必要なもの（上り下りあり）

行程　距離;9．0km

★当日が大阪府の雨予報 50%以上の場合は中止、前日の 17:00 以降にメールで連絡

高安山・十三峠歩行ルート図

高安山駅➡高安山気象レーダー➡

10:40

十三峠の地蔵尊➡十三塚➡

十三峠（昼食）➡水呑地蔵尊➡

12:30　13:10

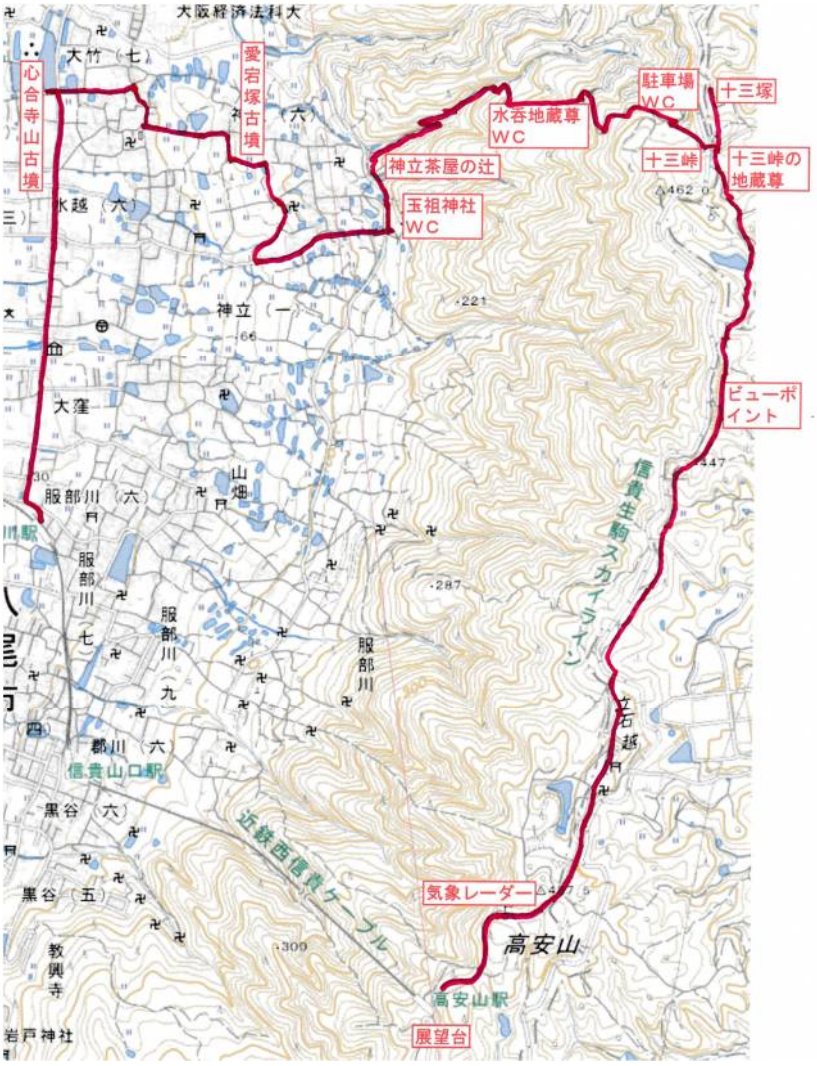
神立茶屋の辻➡玉祖神社➡

愛宕塚古墳➡心合寺山古墳➡服部川駅

16:00

（数字は予定時刻）

高安山駅



十三峠の石仏

十三峠の石仏：十三街道は、八尾市神立と平群郡を結ぶ道筋で、近世には大坂から伊勢参宮のルートとしても賑わった。その峠には旅人安全を願って福貴畑の村人により立てられた地蔵石仏（明治 2 年：1765）があり、街道の道標（元禄 2 年：1689）や松尾寺への道しるべも並んでいる。峠の北側には名称の起こりとなった十三塚があり、重要文化財に指定されている。このルートは「業平道」とも呼ばれ、平安初期の歌人で六歌仙の一人、在原業平が天理より神立の女性の元に通った道ともいわれる。平群町では、中部コース「十三街道と業平ロマンの道」の愛称で案内板を整備している。【出典：『木製説明板』（平群町福貴畑）】

十三塚

生駒山地の稜線上、十三峠のすぐ北側に南北 90mにわたって十三基の塚が並ぶ。最高所にある中央の親塚（径 6m、高さ 1m）が大きく、これを中心に西に 156 度に開いて南北に各六基の小塚（径 4～5m、高さ 0.4～0.8m）が真っ直ぐに並ぶ。この状況から、計画的に築造された十三塚であることが分かる。親塚の西側（正面）には祭壇状の石組みがあり、江戸後期(嘉永 3、1850 年)に立てられた十三塚標柱もある。

神武天皇の皇后墓などの伝承があり、河内方面より参拝者が多く、小旗を立てる等の信仰もみられ、平群側では雨乞の松明行列の道筋になっていた。

昭和 8 年に南側七基が発掘調査されたが、表土層から古銭や土器小片が出土したのみで、埋葬施設や埋蔵遺物は確認されなかった。これ以後、信仰は途絶えたという。

かって、全国に数百ヶ所分布した十三塚が開発行為で激減する中で、完存する十三塚として、兵庫県氷上郡山南町の岩屋十三塚とともに重要有形民俗文化財の指定を受けた。

築造時期は明かではないが、延宝 7 年(1679)編の『河内鑑名所記』に記載があり、中世後半まで遡る可能性がある。（明治 26 年の「大和国古墳墓取調書」より）

水呑地蔵尊

承知三（八三六）年、僧壱演がここに地蔵菩薩を安置して堂宇を設けたという。 本堂の南側に小祠があり、石地蔵の前に二つのつぼがある、こんこんと清水がわいていて、俗に「弘法水」という弘法大使が山麓から急坂を登って、このすぐ上の十三峠を越える旅人のために祈願して得た霊水という。 飲料水として、また脚気などの諸病にも効験あるといわれ参詣者がたえない　この地は桜の名所として名高い。【出典：『史跡の道・説明石板』（八尾郷土文化推進協議会・八尾菊花ライオンズクラブ・八尾市教育委員会、1981 年）】

玉祖神社

式内社で玉祖明神とか、高安明神ともいう、 高安十一カ村の氏神で、和銅三（七一〇）年周防国から分霊を勧請したもので、祭神は櫛明玉命である、この地に玉造部の人人が住んでいたので、その祖神をまつったものであろう。 寺宝も多く、北条時政の制札（重文）男女神像（府、重、美）樟樹（府天然記念物）豊臣秀頼寄進の石灯篭などがある。 神社の北方を東西に十三街道が走り、大阪の玉造に通じ、玉祖、玉造りの地名からこの街道のもつ意義は大きい。【出典:『史跡の道・説明石板』（八尾郷土文化推進協議会・八尾菊花ライオンズクラブ・八尾市教育委員会、1981 年）】

愛宕塚古墳

古墳時代後期の横穴式石室墳である。封土は墳頂部を除いてよく保たれており墳丘は径約二五メートル、高さ六、五メートルで、円墳の形状をよくとどめている。巨石を積み上げた横穴式石室は奥行一六、七六メートル、玄室の高さ四、一メートルを測り、高安古墳群中最大規模の後期古墳である。石室は古くから開口していたが、昭和四二年学術調査が行われた。遺物では凝灰岩製の家形石棺片、鉄製利器、金張鉄製品、土器のほか玉類、鉄地金銅張馬具など優れた副葬品が多量に残存していて被葬者の地位、性格を物語っている。【出典:『史跡の道・説明石板』（八尾郷土文化推進協議会・八尾菊花ライオンズクラブ・八尾市教育委員会、1984 年）】

心合寺山古墳

心合寺山古墳は、5世紀前半につくられた中河内最大の前方後円墳（ぜんぽうこうえんふん）で、当時この地域一帯を治めた豪族の墓と考えられます。墳丘長は約 160m あり、史跡指定範囲の総面積は約 30, 000 ㎡です。墳丘は三段築成で、くびれ部西側に「造り出し（つくりだし）」があり、平坦面には円筒埴輪（えんとうはにわ）や朝顔型埴輪（あさがおがたはにわ）などが立て並べられ、斜面には葺石（ふきいし）が葺かれていました。埋葬施設は、後円部に 3 つの「粘土槨（ねんどかく）」、前方部の「方形壇（ほうけいだん）」の下に木棺がありました。後円部の粘土槨のひとつである西槨から、甲冑（かっちゅう）、き鳳鏡（ほうきょう）、刀剣類などの副葬品が出土しています。周辺には、西ノ山古墳や花岡山古墳など古墳時代前期から中期にかけての古墳が造営されており、心合寺山古墳を含むこれらを総称して「楽音寺（がくおんじ）・大竹（おおたけ）古墳群」と呼んでいます。【出典:『史跡の道・ステンレス製説明板』（八尾市教育委員会、2005 年）】

服 部 川 駅